

薬剤科 DI ニュース

Q. 光線過敏症の原因として、どのような薬剤が報告されていますか？

A. 光線過敏症の原因となる薬剤として、内服、外用を問わず多くのものが知られています。光線過敏症を起こしやすい薬剤は、時代とともに変化し、近年ではニューキノロン系抗菌薬、非ステロイド性消炎鎮痛薬などによる症例が多く報告されています。

<光線過敏症>

光線過敏症とは日光などの照射を受けた皮膚に生じる皮膚炎の総称であり、健常人では皮膚に異常を呈さない程度の光照射でも、皮膚に障害が生じます。先天異常、代謝障害など内的因子が原因で起こる場合もありますが、薬剤や化学物質などの外的因子による症例も多いと報告されています。薬剤による光線過敏症において、内服や注射などによって発症するものは光線過敏型薬疹、外用剤などによって発症するものは光接触皮膚炎と呼ばれています。

<薬剤による光線過敏症の発症機序>

薬剤による光線過敏症は、発症機序と症状によって光毒性反応と光アレルギー性反応に大別されます。

光毒性反応

- ・発症機序：皮膚に到達した薬剤又はその代謝物が光照射を受け、反応性に富む物質に変化して組織・細胞に障害を起こす
- ・光毒性作用を有する化学物質が皮膚に沈着し、作用波長の光線が十分に照射されれば、すべての人に生じうる反応（個人差などはある）
- ・感作期間を必要としないので、薬剤使用后、初回日光曝露でも皮疹が生じる
- ・症状：サンバーン（赤い日焼け）の増強された型で発症することが多い

光アレルギー性反応

- ・発症機序：皮膚に到達した薬剤又はその代謝物の光化学反応に伴い、抗原が形成され、アレルギー反応が起きる（免疫機序を介する）
- ・感作された人にだけ生じる
- ・発症までに感作期間が必要である
- ・症状：皮疹の形態としては湿疹の症状を呈することが多い

その他、**ケトプロフェン貼付剤（モーラス等）**では、剥離後も薬剤の残っている部分を紫外線にさらすことによって発症することが報告されていますので、**使用后 4 週間程度は、紫外線を十分意識する必要があります。**日光のあたる部位に発赤、発疹、腫れなどの症状が現れた場合は、光線過敏症の副作用の可能性もあることを伝え、なるべく日光を避けるようにアドバイスすることが大切です。

（野村）

